サムエル記第一（8）
「イスラエルの迷信」
1 サム 4：1～11

1. 文脈の確認
   Ⅰ．王政に向けた準備（1～9 章）
      A. サムエルの誕生と幼少期（1 章）
      B. ハンナの賛歌（2：1～10）
      C. シロでの霊的状況（2：11～36）
      D. サムエルの召し（3 章）
      E. 契約の箱（4～7 章）
         1. 略奪された契約の箱（4 章）
            (1) イスラエルの迷信（4：1～11）
            (2) 神の栄光が去った日（4：12～22）

2. 注目すべき点
   (1) 士師記の時代の末期、イスラエルは政治的にも霊的にも、混乱状態にあった。
   (2) サムエルが預言者として召される。
   (3) 契約の箱がペリシテ人によって略奪される。

命題：神は、私たちの都合のために利用できるお方ではない。
この箇所を 3 区分して学ぶと、それが分かる。
Ⅰ．敗北の原因を見誤ったイスラエル（1～3 節）
   1. 1～2 節
1Sa 4:1　サムエルのことばが全イスラエルに行き渡ったころ、イスラエルはペリシテ人に対する戦いのために出て行き、エベン・エゼルのあたりに陣を敷いた。一方、ペリシテ人はアフェクに陣を敷いた。
1Sa 4:2　ペリシテ人はイスラエルを迎え撃つ陣備えをした。戦いが広がると、イスラエルはペリシテ人に打ち負かされ、約四千人が野の戦場で打ち殺された。
   (1)「サムエルのことばが全イスラエルに行き渡ったころ、」
      ①このことばは、3 章の最後に置かれるべきものである。
      ②でないと、ペリシテ人との戦いをサムエルが指導したかのように読める。
      ③4 章の出来事は、サムエルがまだ青年であった頃に起こった。
      ④これ以降サムエルは 7 章 3 節まで全く登場しない。

(2) 当時、イスラエルはペリシテ人と戦っていた。

①士師時代の終り頃、イスラエルにとっての最大の敵はペリシテ人であった。

＊サムソンもペリシテ人と戦った（士 13～16）。

②ペリシテ人はセム系の民族ではない。エーゲ海付近からの移住民。

③海岸地帯に 5 大都市を築いた。

＊ガザ、アシュケロン、エクロン、ガテ、アシュドデ

④文明が進んだ海洋民族であり、鉄器を有していた。

⑤彼らの偶像神はダゴンであった。

＊上半身は人間で下半身は魚

＊ダゴンは、本来メソポタミアの豊穣神である。

(3) ペリシテ人は、アフェクに陣を敷いた。

①アフェクは、シロから約 40km 西に位置する。

②イスラエル人は打ち負かされた。

③約 4,000 人が打ち殺された。

3. 3 節

1Sa 4:3　兵が陣営に戻って来たとき、イスラエルの長老たちは言った。「どうして【主】は、今日、ペリシテ人の前でわれわれを打たれたのだろう。シロから【主】の契約の箱をわれわれのところに持って来よう。そうすれば、その箱がわれわれの間に来て、われわれを敵の手から救うだろう。」

(1) 兵は陣営に戻って来た。

①長老たち（年長者たち）は、敗北に驚いた。

②勝てると思っていたからである。

(2) 彼らは敗北の原因を見誤った。

①自らの罪を顧みることはなかった。

②【主】の臨在がなかったので負けたと考えた。

(3) 契約の箱があれば勝利すると考えた。

①契約の箱が戦場にあれば、【主】が助けてくださるだろうと考えた。

②契約の箱が有効であるためには、民の従順と【主】の導きが必要である。

(4) 契約の箱

①【主】の臨在の象徴である。

②十戒が書かれた石の板が 2 枚（シナイ契約の本質）
③「宥めの蓋」（贖いのふた）（神との交わりを可能にした）
④十字架が新しい契約の象徴であるのに似ている。
⑤今も、十字架をお守りか飾りのように扱う人がいる。

Ⅱ．契約の箱をお守りにしたイスラエル（4～9 節）

1．4 節

1Sa 4:4　兵たちはシロに人を送り、そこから、ケルビムに座しておられる万軍の【主】の契約の箱を担いで来させた。そこに、神の契約の箱とともに、エリの二人の息子、ホフニとピネハスがいた。

（1）兵たちはシロに人を送った。
①陣営とシロの間の連絡網は生きていた。

（2）シロから戦場まで契約の箱が運ばれてきた。
①「ケルビムに座しておられる」
②【主】はイスラエルの王であることが示されている。
③エリコの戦いでは、契約の箱は重要な働きをした。
＊当時、民は【主】を信頼していた。
④士師の時代に、イスラエル人の信仰は形骸化した（異教の影響）。
⑤彼らは、ささげ物によって【主】からの助けを得られると考えた。

（3）エリの二人の息子、ホフニとピネハスがいた。
①契約の箱の運び方は律法に適っていたのであろう。
②しかし、堕落した祭司たちの存在は、勝利ではなく敗北を示唆している。

2．5～9 節

1Sa 4:5　【主】の契約の箱が陣営に来たとき、全イスラエルは大歓声をあげた。それで地はどよめいた。
1Sa 4:6　ペリシテ人はその歓声を聞いて、「ヘブル人の陣営の、あの大歓声は何だろう」と言った。そして【主】の箱が陣営に来たと知ったとき、
1Sa 4:7　ペリシテ人は恐れて、「神が陣営に来た」と言った。そして言った。「ああ、困ったことだ。今までに、こんなことはなかった。
1Sa 4:8　ああ、困ったことだ。だれがこの力ある神々の手から、われわれを救い出してくれるだろうか。これは、荒野で、ありとあらゆる災害をもってエジプトを打った神々だ。
1Sa 4:9　さあ、ペリシテ人よ。奮い立て。男らしくふるまえ。そうでないと、ヘブル人がおま

えたちに仕えたように、おまえたちがヘブル人に仕えるようになる。男らしくふるまって戦え。」

(1) イスラエル人は大歓声を上げた。

①エリコの戦いを再現した（ヨシ 6：20）。

(2) ペリシテ人は恐れた。

①ラハブは、エリコの住民は【主】を恐れていると言った（ヨシ 2：9～11）。

Ⅲ. 神の裁きを受けたイスラエル（10～11 節）

1. 10 節

1Sa 4:10　こうしてペリシテ人は戦った。イスラエルは打ち負かされ、それぞれ自分たちの天幕に逃げ、非常に大きな打撃となった。イスラエルの歩兵三万人が倒れた。

(1) イスラエルは大敗した。

①契約の箱は勝利をもたらさなかった。

②敗北の原因は、罪にあった。

③イスラエルはアイでの戦いに敗れた（ヨシ 7：11）。

④敗北の原因は、アカンの罪にあった。

(2) 歩兵三万人が倒れた。

①イスラエル兵は、四方八方に逃げた。

②統率がなくなった軍隊は弱い。

③イスラエルには騎兵も戦車もなかった。

④歩兵三万人とは驚くべき数である。

2. 11 節

1Sa 4:11　神の箱は奪われ、エリの二人の息子、ホフニとピネハスは死んだ。

(1) 神の箱は奪われた。

①【主】の臨在は去っていた。

(2) ホフニとピネハスは死んだ。

①無名の預言者の預言どおりである（2：34）。

結論：今日の信者への適用

1. 信仰を「神との関係」ではなく「結果を得る手段」にしてはならない。

(1) イスラエルは契約の箱を持ち出せば勝てると思った。

（2）しかし、彼らが求めていたのは神ご自身ではなく、「勝利」という結果だった。
（3）今日の信者も同じ誘惑に直面する。
（4）信仰生活の中心は、「神から何をいただくか」ではなく、「神ご自身を愛すること」。
（5）詩 27：4

Psa 27:4　私は一つのことを【主】に願った。／私はそれを求めている。／私のいのちの日の限り、【主】の家に住むことを。／【主】の麗しさを仰ぎ見、／その宮で、思いにふける、そのために。

2. 問題の原因を外側に求める前に、自分自身を吟味する。
（1）長老たちは、「どうして主はわれわれを打たれたのだろう」と語った。
（2）しかし彼らは悔い改めなかった。
（3）彼らは罪の問題を見ようとせず、契約の箱という「外的対策」に走った。
（4）私たちも、何か問題が起こると、外に原因を求めやすい。
①教会が悪い
②社会が悪い
③政治が悪い
④家族が悪い
⑤環境が悪い
（5）まず、自分を吟味しよう。
（6）リバイバルは他人の悔い改めからではなく、自分自身の悔い改めから始まる。

3. 外面的な宗教よりも内面的な従順を重んじよう。
（1）契約の箱は本来、神の臨在の象徴であった。
（2）しかしイスラエルは、それをお守りのように扱った。
（3）今日でも同じ危険がある。
（4）宗教が私たちを守るのではない。
（5）サムエル 15：22

1Sa 15:22　するとサムエルは言った。／「主は【主】の御声に聞き従うことほどに、／全焼のいけにえや、その他のいけにえを／喜ばれるだろうか。／見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、／耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。

（6）神は宗教的行為そのものではなく、従順な心をご覧になる。
（7）私たちは、神の栄光のために生きる者として召されている。